京都大学	博士(文学)	氏名	菊　池　信　彦
論文題目	フランシスコ・ピ・イ・マルガルの生涯とその思想 ── 19 世紀スペインにおける連邦主義と歴史認識 ──		

（論文内容の要旨）

本論文は、19 世紀スペインの連邦主義者であるフランシスコ・ピ・イ・マルガルの生涯とその思想について、歴史認識の観点から考察を行ったものである。

第 1 章「ピ・イ・マルガルの生涯と連邦主義」は 4 節からなり、ピ・イ・マルガルの生涯とその思想を論じた先行研究を整理し、ピ・イ・マルガルの生涯を概観したうえで、彼の連邦主義思想の特徴を検討し、問題点を抽出している。第 1 節「ピ・イ・マルガルの生涯とその思想に関する先行研究」では、従来の研究の問題点として、政治家あるいは思想家としての活動に焦点を当てたものが中心となっていること、研究対象が 1868 年から 1874 年までの「革命の 6 年間」を中心としていること、政治家・思想家以外の観点からなされたピ・イ・マルガル研究では、彼の生涯全体を視野に入れた研究がないこと、などを指摘した。第 2 節「ピ・イ・マルガルの生涯」では、ピ・イ・マルガルの生涯を概観した。青年期（『反動と革命』（1854 年）において連邦主義を唱えはじめる以前）には、ピ・イ・マルガルはロマン主義の影響を強く受け、歴史研究を志していた。壮年期（第一共和政が崩壊する 1874 年まで）には、歴史家あるいは芸術批評家としての活動が背景に退き、思想家として連邦主義を唱え、また政治家として連邦共和制の実現に向けて活動した。老年・晩年期（第一共和政崩壊から 1901 年に没するまで）には、『諸国民性』（1876 年）において自身の連邦主義思想の体系化を行ない、併せて政治活動や歴史研究も継続していたことを示した。以上の検討をふまえて、彼が生涯全体を通じて歴史研究を続けていたこと、同時に連邦主義者であり続けたことを指摘した。第 3 節「ピ・イ・マルガルの連邦主義──プルードン思想との比較を通じて」では、主著『反動と革命』と『諸国民性』をとりあげ、プルードンの連合主義思想との比較を行い、ピ・イ・マルガルの連邦主義の思想的特徴を明らかにした。一連の考察の結果、青年期の『反動と革命』と比較して晩年の『諸国民性』においてはスペインの「国民」的なまとまりをより強く意識するようになっていること、また、プルードンの影響を強く受けているとみなされてきたピ・イ・マルガルの連邦主義思想にも非プルードン的な特質が認められ、それが彼の歴史認識に深く根ざしていることを指摘した。第 4 節では第 1 章全体のまとめとして、ピ・イ・マルガルの歴史家としての活動が彼の生涯にわたって重要な位置を占めるものであったこと、彼の連邦主義が歴史認識に依拠していたことを指摘し、第 2 章以下の分析を行なうための研究視角として、歴史認識という観点を採用することを述べた。

第 2 章「連邦主義以前、青年期の歴史認識──イスラム・スペイン史をめぐって」で

は、1850年に出版された『グラナダ王国』を分析の中心に据え、連邦主義者として本格的に活動をはじめる以前の、初期の歴史的著述にみられる歴史認識の特徴を考察した。第1節「19世紀スペインにおける国民史認識の構造」では、19世紀半ばのスペインにおける国民史認識とイスラム・スペイン史認識との関係について、1850年代に始まった国民史叙述やアラブ学者の歴史書などの史料を通じて概観した。その結果、当時の国民史認識は、キリスト教国スペインとしての歴史の流れが正当とされ、イスラム・スペインの歴史が「他者の歴史」として排除されていたことが明らかとなった。第2節「『スペインの記憶と美』とピ・イ・マルガル――史料としての建築」では、『グラナダ王国』が出版されるまでのピ・イ・マルガルの執筆活動とそこに見られる彼の歴史観を検討した。当時のスペイン建築史研究において国民の歴史を表象すると考えられたのはゴシック建築に代表されるキリスト教建築であった。このような時代背景のなかで、ピ・イ・マルガルもまた建築を民族の歴史を表象する史料として捉えていたが、他方でエジプトやインドなどの「オリエント建築」を論じる素養があり、多様な諸民族の歴史の中に統一的規範を見いだそうとしていたことを指摘した。第3節「アルハンブラの「思い出」とその継承――『グラナダ王国』の叙述分析」では、スペイン国民史を形成する文化事業の一つとして1839年に刊行が始まったシリーズ『スペインの記憶と美』の一冊である『グラナダ王国』をとりあげ、その歴史認識の特徴を考察した。当時、アルハンブラ宮殿の記憶は、キリスト教国スペインとは相容れない「他者の歴史」として受け止められており、『グラナダ王国』の記述にもそのような傾向がみられる。しかし、ピ・イ・マルガルには、イスラム・スペインの歴史を「我々の歴史」とみなす視点も認められる。第4節「青年ピ・イ・マルガルの歴史認識」では、このような「矛盾した」歴史認識を同時代の歴史哲学と照らし合わせることで、ピ・イ・マルガルの多元的な歴史認識の構造を明らかにし、このような歴史認識が彼の連邦主義を支える原理となっていたことを指摘した。

第3章「カントナリスモと歴史の利用――壮年期の活動から」では、1873年の第一共和政期におけるピ・イ・マルガルら連邦共和党執行部と、ムルシアを中心とした革命運動であるカントナリスモとの相克について、歴史の利用という観点から考察した。第1節「「カントナリスモとは何であったか」――その概略と解釈をめぐって」では、カントナリスモの経緯を概観し、先行研究における解釈が、初期社会主義革命か否か、また、連邦主義か地域主義かという点をめぐって分かれてきたことを確認した。また、カントナリスモの思想的淵源はピ・イ・マルガルの連邦主義思想にあるとする先行研究の解釈には矛盾があることを示した。そのうえで、カントナリストと連邦共和党執行部の対立の焦点は連邦構築の過程にあり、カントナリストが唱えた「下からの」連邦運動の根拠を探る必要があることを指摘した。第2節「カントナリスモは何であろうとしたのか――機関紙の分析から歴史認識的起源へ」では、その根拠を探るために、カントナリストの機関紙『カントン・ムルシアーノ』と、カントナリストが1870年に著

した歴史書『ヘルマニアスの歴史』の分析を行った。その結果、カントナリストは16世紀の「革命運動」であるヘルマニアスの反乱を、スペインに連邦を形成しようとした先例と捉えていたこと、また、彼らが自らの革命を通じてヘルマニアスの反乱が掲げた目標の完遂を目指していたことを明らかにした。第3節「連邦共和党執行部の連邦主義と歴史の利用」では、連邦共和党執行部のピ・イ・マルガルとエミリオ・カステラールの連邦主義をとりあげ、彼らの歴史認識がカントナリストのそれと大きく異なるものであることを明らかにした。ピ・イ・マルガルは、ヘルマニアスの反乱や、同時期に生じたコムニダーデスの反乱には、自身の連邦主義の理論的基盤を置いていなかった。また、カステラールは、ヘルマニアスの反乱やコムニダーデスの反乱に対して、中世スペインにおける分裂状態への回帰を目指す運動して鋭く批判していた。以上の点から、カントナリストと連邦共和党執行部の対立の根には両者が利用する歴史認識の対立があったのであり、カントナリスモがピ・イ・マルガルの思想に由来するという説は退けられる。第4節「歴史の利用がもたらしたもの」では、連邦共和党執行部とカントナリスモの歴史認識の対立を19世紀のスペイン史学史の流れのなかに位置づけ、両者の対立が当時の歴史研究と密接な関係にあることを示した。また、カントナリスモが16世紀の反乱の記憶を利用したことが、この革命運動の解釈を多様なものにする要因となっていることを指摘した。

第4章「キューバ擁護論にみる「真の歴史」――老年期から晩年にかけて」では、ピ・イ・マルガルが老年期から晩年にかけて展開したキューバ擁護の活動と言説を分析し、それが彼の思想において果たした意義について分析した。第1節「自治主義と独立運動――ピ・イ・マルガルら3者の活動について」では、自治主義者ラファエル・マリア・デ・ラブラと独立運動家のホセ・マルティの生涯を紹介し、ピ・イ・マルガルの晩年の活動について概観した。第2節「自治主義の特徴とその根拠――ラブラとの比較を通じて」では、自治主義の観点からラブラとピ・イ・マルガルの思想の比較を行い、ピ・イ・マルガルが連邦主義者としての立場から自治主義を唱えていたこと、その根拠には、民族自決の考えと共に、400年間の植民地統治による文明化の使命の完了という考えがあることを明らかにした。第3節「独立支持への変化――ホセ・マルティと「アメリカ」をめぐって」ではマルティとの比較を通じて、ピ・イ・マルガルの独立思想の特徴を論じた。ピ・イ・マルガルは、先住民の虐殺と植民地統治の歴史をふまえて、スペインによるキューバ支配を否定すると共に、アメリカ合衆国の連邦主義の拡大を支持することで、今後のキューバをスペインではなく合衆国に託そうとしていたこと、また、スペインが再び戦争を繰り返さないためにも「真の歴史」を書くことでナショナリズムという「幻覚」から目を覚まさせる必要があると考えていたことを示した。第4節「『19世紀スペイン史』」では、前節で指摘した「真の歴史」の認識を遺著『19世紀スペイン史』から析出し、ピ・イ・マルガルが19世紀を戦争の世紀と捉え、その原因に帝国支配を正当化するナショナリズムがあったこと、そのナショナリズムが16世紀

以来のスペイン史を「栄光」の歴史とみなす誤った歴史認識に由来すると解釈していたことを明らかにした。また、彼が、19世紀に生じた諸戦争を、スペインを破壊する地域的な独立運動としてではなく、各地域で国家を作りスペインを形成しようとする半島戦争（独立戦争）以来の国民的な運動として認識すべきものと考えていたことも示した。これがピ・イ・マルガルの「真の歴史」認識であり、彼は、19世紀スペイン国民史を、多様性と統一性を体現した多元的国民史として捉えたのである。

結論は、以下の通りである。ピ・イ・マルガルの歴史認識は、その生涯をつうじて変化している。その契機となったのは、1873年の共和政の失敗の経験であった。この経験をへて、彼の歴史認識は、スペインを多元的歴史空間とみなす静態的な歴史認識から、各地域がそれぞれ「国家」を形成しようとしつつスペイン全体の統一性も損なわれずに構築されるという動態的な歴史認識への変化であった。この歴史認識の変化にともなって、彼の唱えた連邦主義も変化していった。それは、契約関係によって相互に自立した政治体によって構築されるという青年期・壮年期の連邦主義から、連邦政府によるスペインの統合的権力を認める老年・晩年期の連邦主義への変化であった。

以上のようなピ・イ・マルガルの歴史認識は、従来の国民史認識の議論においては登場しなかった多元的な国民史認識の存在を証明するものである。今後の国民史認識の検討においては、英米独仏といった主要国にとどまらず、史学史・歴史認識の歴史をより広い視野で学びなおし、国民史の共通理解の枠組みの中にそれらの知識を組み込む必要があるであろう。

（論文審査の結果の要旨）

19世紀スペインの政治家・思想家フランシスコ・ピ・イ・マルガル（1824－1901）は、『反動と革命』（1854）、『諸国民性』（1876）などの著述において独自の立場から連邦主義の理論化を行なう一方、スペインの歴史にかんする著作も多く著した。他方で、連邦共和党の結成（1868）に加わり、第一共和政期（1873）には大統領に就任するなど、政治的な実践に深く関与したことでも知られる。本論文は、19世紀スペインの政治史・思想史において重要な位置を占めるこの人物の生涯と思想について、主として彼の連邦主義の主張と歴史認識との関係に焦点をあてながら考察したものである。

論文全体は4章から構成されている。第1章では、ピ・イ・マルガルにかんする先行研究を整理し、著述家・政治家としての生涯を概観したのち、政治理論面での代表的著作である『反動と革命』と『諸国民性』をとりあげ、そこで展開されている連邦主義的な国家論をプルードンの連合主義の理論と比較検討して、両者の共通点と相違点を明らかにしている。第2章以下の3つの章はそれぞれ、ピ・イ・マルガルの青年期、壮年期、老年期の思想と実践の検討にあてられている。第2章では、ピ・イ・マルガルの初期の著作『グラナダ王国』（1850）をとりあげ、彼がイスラム・スペイン史の遺産をどのように記述しているかを検討することによって、キリスト教的な文明論にもとづくスペイン国民史観とは異なる、多元的な歴史認識がみられることを指摘した。続く第3章では、ピ・イ・マルガルが大統領職にあった第一共和政期に連邦共和党の執行部と対立した革命運動であるカントナリスモに着目し、その運動の指導者たちの「下からの」連邦主義の主張を彼らの歴史認識をふまえて分析することによって、壮年期のピ・イ・マルガルの連邦主義との相違点を明らかにした。第4章では、老年期から晩年にかけてのピ・イ・マルガルの植民地キューバをめぐる言説をとりあげ、植民地自治の擁護からキューバ独立の支持へとその主張が変化したことを明らかにするとともに、スペインの植民地支配をめぐる彼の歴史認識と連邦主義の主張との関連について考察している。

本論文において論者が採用した研究の視点と方法には、以下の3つの特徴が認められる。第1に、論者は、ピ・イ・マルガルの政治理論が、多様な個性をもつ地域からなるスペインの過去をめぐる独自の歴史認識をふまえたものであることに着目した。多様性と統一性を併せもつ連邦制国家の実現を追求するピ・イ・マルガルの思索と実践の軌跡を、つねに彼の多元的な歴史認識と関連づけながら考察することによって、論者は、この思想家の連邦主義の主張がいかなる歴史的土壌に根ざしたものであったかを明らかにすることに成功している。

第2に、論者は、ピ・イ・マルガルの思想を考察するさいに、19世紀に刊行されたこの思想家自身の著作を、各版のテキストの異同にも注意しながら詳細に分析するだけでなく、つねに関連する同時代の他の思想家・著述家の言説をも参照し、比較・対

照しながら議論を進めている。たとえば、第1章では、プルードンの著作との綿密な比較検討をつうじて、ピ・イ・マルガルの連邦主義がプルードンの連合主義からどのような影響を受け、また、どのような点に独自の主張がみられるかを明らかにした。第2章では、19世紀のスペインにおける国民史学の代表的著述と対比することによって、ピ・イ・マルガルの歴史叙述に彼独自の多元主義的な発想が認められることを示した。また、第3章では、ピ・イ・マルガルを首班とする政権に対抗する勢力の言説をとりあげることによって、第一共和政期前後のスペインにおける連邦主義がその内部に対立・葛藤をはらんでいたことを示すと同時に、ピ・イ・マルガルの連邦主義には、各地域の個性を尊重する分権主義的な側面だけでなく、国家全体の統合を重視する側面があることが逆照射されている。同様の手法は第4章でも採用され、自治主義者ラファエル・マリア・デ・ラブラ、独立運動家ホセ・マルティの言説と比較することによって、キューバ問題をめぐるピ・イ・マルガルの主張の独自性が明らかにされている。このような比較研究の手法によって、連邦主義者としてのピ・イ・マルガルの著述と政治活動に多面的に光があてられ、その思想的営為の意義が同時代のより広い文脈のなかに位置づけられたことは、本論文の重要な貢献の1つである。

第3に、論者は、とくに第4章において、ピ・イ・マルガルの連邦主義の可能性と限界を、スペイン本国に限定せずに、植民地空間を含む帝国的な広がりのなかで考察している。ここでの論者の考察は、ピ・イ・マルガルがアメリカ合衆国の連邦制についてどのように認識していたか、また、連邦主義的な国家統合の主張と植民地の独立支持の立場とがどのように結びついていたのか、などの点について必ずしも十分な議論を尽くしたものとはいえないが、ピ・イ・マルガルの連邦理論の射程がフィリピンやラテンアメリカをも含むグローバルな広がりをもっていたことを示唆している点で、今後の研究のさらなる発展を期待させるものとなっている。

本論文は、ピ・イ・マルガルの生涯と思想の全体像を対象とする日本では最初の本格的な研究であり、また、以上に述べたような研究の視点と手法を採用することによって、より広く、スペイン近代史研究や近代ヨーロッパにおける連邦主義思想の研究にたいしても、新たな知見をもたらすものといえるであろう。他方で、ピ・イ・マルガルの歴史認識を重視しながら、彼の歴史叙述のなかでスペイン史上の重要な転換点や事象が具体的にどのように論じられているかが必ずしも十分には考察されていないこと、連邦主義陣営の内部における政治路線の対立が十分な論証なしに歴史認識の相違によって説明されている点など、問題点も残されている。とはいえ、これらの点は、論者が独自の視点を設定したことによってはじめて浮びあがってきた新たな課題でもあり、本論文の成果を足がかりとして今後の研究のさらなる発展が期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2011年1月6日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄についての口頭試問を行なった結果、合格と認めた。